

労働者も、其の努力の死活は、此の眞諦を解すると否とによつて定まるのである。(八、二八)

六八、飲 酒

— 雪の朝花の下の飲酒は興あるもの也 —

人間には酒を廢することは出来ぬものと見ゆる。月の夜、雪の朝、花の下にて心のどかに物語して、盃のやりとりするは興あるものなるも、黒さ、穢なき、片肌ぬぎて、あるは我身のいみじきことをかた腹いたく云ひさせ、あるは醉なきし、互に罵りいさかひして、あさましく恐ろしく、はぢかましき振舞は、古へ今にかわらぬ酒の咎とも云ふべきである。露西亞は事局に鑑みて、一旦禁酒令さへ出し、一切酒を禁じたのであるが、

法令を破つて飲酒せるもの頻出し、今は往々默許の態で、餘り嚴重に執行が出来ぬようである。

禁酒令の爲めに、兵士が戦場に出づることを嫌ひ、労働者は酒の代りに石油さへ飲むことになつた。又香水の中に丁幾劑や、酒精分の混ざるものは薬用と稱して、飲むものが多數だと云ふことである。

石油も飲めば仲々酔心地がよい石油を飲むには鹽化石灰を混じて強く震盪し、ソレから生石灰を入れて鹽素の氣を抜き、其上澄みを飲めば臭氣を感じず、至極飲み心地がよいと云つて居る。

英國にてもロイド、ジョウジ氏が一旦禁酒斷行を主張したが、男子の反對ばかりでなく、婦人社會より猛烈なる反對を受け、流石のジョウジ氏も莫連婦人の氣焔に捲かれ、終に沙汰止みとなつたのは惜いことだ。

我邦では個人には禁酒を奨励するが、政府は酒を奨励せぬと、財政の根抵が崩れる。酒の収入が一ヶ年七千萬圓で地祖の上に居る本年は平年に比して五六十萬石も醸造高が減じ、七百五十萬圓も歳入の缺陷を生じたので當局者は大恐慌の態である。

北海道は平年十萬石ほどの醸造高であるが、本年は本道生産が三萬石も殖え輸入が其れだけ減じたので、税金だけでも六十萬圓増収があると云ふので税務の諸君は大喜びである。

吾輩は禁酒論者でもないが、亦奨励する程の勇氣もない併し酒の爲めあら人間の壽を縮め、子孫に餘毒を遺し、日常生活に困憊を來し一身一家を滅するも尙ほ顧みることの出來ない憐れむべき人物の多いのは歎かはいことである。(八、三〇)

六九、同志會宣言書

——耻の上塗を爲すもの也——

同志會にては大隈内閣居据りに付き輿論の非難甚しきに顧み今回宣言書を公表して其態度を宣明して居る其云ふところ平素の大言壯語に似ず頗ぶる曖昧糲稜を極めて居らるゝは寧ろ噴飯に禁へざる次第である。

宣言書の論結

大隈伯が一旦總辭職をしたのは何事に就て、何ういふ責を引いたのかといふと今裁判所で調べて居る議員の瀆職事件即ち昨年幕議會で政友會の議員の中に賄賂を貰つて増師案に賛成したといふものがあるといふ事件につき大浦内務大臣が世間から疑はれたので政界の大掃除を一の政策と

して居る大隈内閣の一員として此疑を受くるのは相濟まぬといふので責を引き辭職されたもので内閣と此事件の關係は何うであるかといふと元來内閣の増師案其他内閣の政策を打壞す行動あるに於ては斷然議會を解散して國論に訴ふるの大方針を決定して居たのであるから其際區々の小策を弄するが如きことは斷じてない従つて輿論内閣としては瀆職事件に何等の關係のなかつた事は事實である併し首相は内閣の統一を保ち政治の大方針が行はれるやうにする位置に立つて居るから目が届かなかつたといふことに深く恐縮して辭職された他の大臣は首相推薦して任命された人々だから首相が辭任する以上は自分等も辭任せねばならぬと決心して茲に總辭職となつたのである夫故形は内閣の總辭職だが連帶責任の爲めに總辭職ではないし連帶する謂はれもないのである

即ち彼等の云ふところは瀆職事件は大浦内相一箇の責任にして大隈内閣の政策と相容れざるものである他の諸大臣は毫も關知せざる事なれば素より連帶責任を取るものでないと云つて居る。然らば大隈伯は何故に辭表を提出したかと云へば首相は内閣の統一を保ち政治の大方針が行はれるやうにする位置に立つて居るが目が届かなかつたと云ふことに深く恐縮して辭職されたのであると云つて居る。政治は公明正大ならざるべからず立憲國の大臣は其出處進退に付き一定の純理なかるべからず然るに彼等は猶ほ曖昧の言を用いて天下を欺かんとして居る。道を以てすれば衆愚を欺くことは出來得べきも識者を欺くことは出來ぬ。

殊に立憲國に於ける内閣制は單獨責任を許さぬ内閣は個々獨立して責任を

取るものでなく聯帶責任の衝に立つことは憲法上の大本義である。
今更ら彼等の罪惡を糾弾するも六莖十菊何等の効はないが同志會は苟くも
天下の公黨を以て任ずるものである斯る窮餘の小言を以て自黨を辯護せん
とするは偶々耻の上塗を爲すものにあらざるなきか。(八、三二)

七〇、金鱗波に輝く一日

千代を祝ふ天長の佳節に、あたり一日を空しく暮すも心外だと思ふ時しも
醉古、西美、牧川の諸氏が來た。西美の企ては是れから近き邊の池沼に釣
を垂れるも一興だとあつて一同之に賛成。ソレ釣だ糸だ竿とばかりに騒ぎ
立て用意をさく、怠らずナダレ打つて門を出る。
時は午下一點鐘、颯々の風は北海の秋を告げて諸葉を彩る紅に笑む。一

行は難かしく曇る空を忘れ眼の邊の水に心を寄せて我先きにと糸を投げ附
ける。漣にゆらく浮標にも胸躍らせながら此處の柳蔭、彼處の草の上に唯
我獨、太公望をさめこむも可笑しい。
醉古は漸くにして鮒一尾を獲た。一同は勇を鼓して風をよぐにも夫れかと
氣を揉み藪蚊騒ぐには心も留めないで夕暮近く迄静座する、其念力には流
石の水の神も感じたであらう。予は巨口の金鱗數尾を獲て一行を驚かした
又駄句二三をものして當日の興を添へた。

浮子動き金鱗波に輝けり
牧堂當日第一の功を褒めたもの
忍耐は成るのとなり鮒一尾
是れは醉古氏の事を云ふ

魚釣り序論ばかりで日を暮す

西美氏は當日の東道人で尤も講釋に巧みであつて一尾も獲ない。

王蜀黍焼いて貢ぐや筈のまゝ

牧川漁郎と云ふも名ばかり玉蜀黍の接待に急がしむ。

蚯蚓掘り鑿提げて行く堀の端

是れは某と云ふ従者の事である。

物云はず唯盆鎗の立見かな

前倉子の見物振を云ふたものである。(九、二)

七一、勸農詞

—— 歙先きの天下泰平 ——

帝國農會にては大典記念事業として全國に渉り記念講演會を催すと云ふの
て北海道にても三日午後より道會議事堂で俵長官佐藤學長早川千吉郎等
の諸氏が大講演を試むをうて洵によい計畫である。

吾輩も其趣旨を賛する意味にて俳人一茶の勸農詞を廣く紹介しよう一茶は
信州柏原の人通稱は小林彌太郎性超凡洒脫平生農業の尊ぶべきを知り勸農
詞を作りて田園趣味を鼓吹せる如き人の知るところである餘り珍らしくも
ないが俳文として一寸と面白いから左に録す。

勸農の詞

風流を樂む花園ならで、後の畑前の田の物作に志し、自ら鋤を採て耕
し先祖の賜と命の親に懇を盡し、吉野の櫻更科の月よりも己が業こそ樂
しけれ朝夕心を留て打向ふ菜種の花は井手の山吹より好しく、麥の穂の

いろは牡丹芍薬より腹ごたへありと覺ゆ、朝顔より夕顔こそよけれ、萩桔
梗よりも芋牛蒡に味あり、渾て花紅葉より栗柿は實の植木なり、稻の穂
並の賑しく菊の花より腹滿る心地して、粟穂に馴るゝ鶉野邊の蟲の音聞
が面白く遠き名所舊蹟より近き田圃の見廻りが飽かず、松島鹽竈の美景
より飯釜の下肝要なり、上作の名劍より鎌鍬は調法なり、書畫の掛物よ
り掛て見る作物の肥を油斷せず、投入、立花の工より茄子大角豆の正風
なるが見處多く。茶の湯蹴鞠の遊より溢茶を飲んで昔語こそ樂しけれ
玉の臺より茅葺の家居が心易く、高きに居らねば落るあぶなげなく、迷
はねば悟らず、念佛のかはりに業を怠らず、實義を盡すは神詣に比し、
仁者にならふて山には木を植ゑ智者の心を汲て田の水加減を專にし、
珍肴鮮肉の料理より、錢入らずの雑炊が後腹痛る氣遣なし。すべて世の

中は飛鳥の川の流れきのふの淵は今日の瀬となる如し。唐の咸陽宮萬里
の長城も終には亡び、平相國の驕も一世のみ、鎌倉の將軍も三代をす
ぎず、北條足利の武威盡き、織田豊臣の榮も終に一代なり。時過ぎ世替
れば誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にあるうち、伽羅蘭麝の薫
りもかく内のみ、樂は苦の基財實は後世の障遊興はしばしの夢、他の
富も羨まず、身の貧も歎かず、唯慎むべきは貪慾、恐るべきは奢なり。
抑田地は萬物の根元にて、國家の主實なれば父母の如く敬ひ、主君の
如く尊み、妻子の如く育み、寸地をも捨ず何處にても鍬先の天下泰平五
穀成就を願より外更になし。

今年米親と云ふ字を拜みけり

七二、日本文明を整理陶冶すべし

風俗は上より下に移ると云ふが、現代我邦の風俗程、亂離を極めて居るものはない。凡て人生の最大要素たる衣食住を始め、其他社會萬般の上にて於ける民風なるものを見るに。凡て統一なく、秩序なく、規律なき混亂の情況を呈して居る。

建築の如きも、英米獨佛、孰も其民族、其時代に依り、一定の様式がある同じセセツシヨンでも、ルネサンスでも、ゴシックでも態容手法は、多少づゝ異なるも大體に於ては其の國々に依り民族性の發揮がある。

我邦でも奈良朝、平安朝、鎌倉足利元祿等其時代々々に依り、文物制度に一定の洋式が備つて居たのである。然るに明治維新後は、渾ての制度を破

壞して、一に模倣の時代と化したる爲め、社會萬般の制度が、玉石同架亂離不秩序を極むることとなつたのである。

衣服の如き、洋服あり、和服あり衣冠束帯あり、同じ洋服の中にも、燕尾服に、フロックに、脊廣あり、和服にも羽織袴に、丹禪に、襦袍に、寢巻に、不斷着に、千種萬様、數へ盡されぬ程である。

一寸旅行するにも、洋服も必要、和服も必要、寢巻も必要、帽子に靴に外套足駄、草履等も、用意しなければならぬ。洋服も二三種和服も四五種、帯にも角帯び丸帯あり、寢巻に外套と、宛て辨慶の七ツ道具は愚か手観音でも持ち切れぬほどの仕度がある。故に旅行革靴の如きも一つで済むものは二ツも三ツも要する譯である。

衣服は其の通り建築にも和洋折衷もあり江戸時代の土藏作りもあればカフ

エー式のペンキ塗もありルネサンスの擬ひもありセセッションの模倣もあり高低參差不規則極まるものである。

食物も其通り今日は洋食翌日は日本料理宿屋に泊ればスープにパンに珈琲に其れより膳碗の献立が出る味噌汁に澤庵梅干ライスカレーの後に米の飯の茶漬、ビールに刺身恁んな不合理不調和があつても、國民は平然たるものである。

衣食住は、勿論、教育界も、思想界も、渾てが斯の通りである、昨はオイケン、今はベルゲソン、又忽ちにしてタゴールに趨る國家主義に、個人主義、家族主義に、民族主義、泛々様々定處なく衝突、矛盾、迷誤錯覺尫然雜然實に驚くべき情況である。

要するに模倣を能事とし、清新を趁ひ、流行を追ふ所以は、國民に一定の自信なく、自覺なき所以である、他あることを知つて、己れあることを知らざるが爲めである、過渡時代は暫く止むを得ずとするも、將來の日本國民は、確固不動なる自信の上に立ち、日本文明を整正陶冶するの覺悟を有せなければならぬ。(九、四)

七三、天才と狂氣

世に天才なるものがある。天才とは努力の及ばざる極度の叡智を云ふので人間業ではない。神品自然に備はる天の麗質を云ふのである。

我國でも古來神童と稱するものがある、菅原の道真は七才にして詩を作り頼山陽は十有三春にして既に詩人の稱を得て中井竹山を驚したと云ふ如き幾多の例がある。

近世の碩學ロンブロッソは天才は狂氣であると云つて其研究の結果を公にして居る。即ち

天才は、大部分は精神的並に肉體的疾病に於ける變質の結果である、即ち大酒、微毒、狂氣、肺病等の兒童に遺傳したる作用の結果である。

精神的方面より云へば是等變質の結果は道德的には無感覺、道德心の喪失衝動性、心理的不均、異常なる沈黙又は饒舌、病的虛榮心、非常なる獨創力、自己偏執となつて現れる。

肉體的方面としては、突出せる耳鬚髯の缺乏、齒列の不揃、顔面頭部の非常に大なるか、又非常に小なるかより來る過度の不釣合、性慾の早熟、身體の矮小、若くは不權衡、左利、吃言、佝僂、肺結核等は天才者の表現である。そして其の確證があるとして是等に對する數限りなき天才者を分類批

評して居る。二三の例を擧ぐれば

身體矮小を以て有名なる人々は、ホラチウス、アレキサンデル大王アリス トトレエス、ブラトーン、エピロス。近代にては、バンドウス（大鼓と云綽名の人）ベートルフエンラエル（人形と云ふ綽名）フランシスサピユルなどである。

佝僂、蒼白、憔悴なども天才には普遍的通有性であると云ふことだ。

又子孫のなきことも天才者偉人の獨有である。ベエコン曰く最も高尚なる事業や、創立は子なき人々から發した。是等の人々は彼等の心意の影像を表白することに贏得て、肉體の影像を表白するに失敗したのだ。

英國の大詩人は大抵子孫がなかつた。シエクスピア、ジョンソン、ミルトン、ゴールドスミス、又獨身者で子孫を作らなかつた人々は、詩人天才

者には非常に多い、一寸例を擧るもカント、ニエートン、ビット、フォック、ス、ガルシオ、デカルト、スピノザ、ベエル、ダルトン、ヒエームギボン、シヨペンハウエル、ヴォルテール等數へ盡されぬ。我國でも近ごろ天才者が非常に殖へて來た。顔色憔悴形容枯槁の人が彼方にも此方にも蠢々々々して居る。

獨創や發明の多いのは歡迎するが屈原や、ニツチエのやうな偏狹執見の人や、葦原將軍や、大隈伯の如き狂氣の天才者が殖へると國は滅亡するより外なからう。(九、五)

七四、後方羊蹄の起源

北海道史蹟として最も研究を要するものは、阿倍比羅夫の東夷征伐である。

齊明天皇の四年夏

阿倍臣關名率舟師一百八十艘伐蝦夷。罽田淳代二郡蝦夷望怖乞降於是。陳船於罽田浦。罽田蝦夷、恩荷進而誓曰不爲官軍故持弓矢。但奴等性食肉故持云。仍授恩荷以小乙上一定。淳代津輕二郡郡領於是有間濱。召聚渡島蝦夷等大饗而歸。

同朝五年二月

是月遣阿倍臣關名率舟師一百八十艘討蝦夷國。阿倍臣簡集飽田淳代二郡蝦夷二百四十一人其虜三十一人。津輕郡蝦夷一百十二人其虜四人。膽振鉏蝦夷二十人於一所大饗賜祿。膽振鉏此云伊浮梨沙陸。卽以船一隻與五色綵帛。祭彼地神。至肉入籠。時問蒐蝦夷膽鹿島蒐穗名二人進曰可以。後方羊蹄爲政所。

書紀の此記事が國史に於ける後方羊蹄の起源で阿部比羅夫の征討と與に、
本道に於ける唯一の史蹟である。又膽振と云ふ文字の起源も、此の書紀の
一節に見ゆるが始めてある。

後方羊蹄は果して本道内に在るものと同なるや否は、深く考究を要すべ
きものなるが、史實の上より研究すれば、遺憾ながら是は本道の土地でな
いことだけは明かである。

然らば當時の後方羊蹄は何處に在るやと云へば、出羽の北邊あたりである
ことは史蹟の前後に徴して略ぼ知ることが出来る、肉入籠に至る云々、肉
入籠は秋田の綴子と云ふところて、其轉訛かシシリコとなつたのである。
又膽振は市振の轉訛で、今越後の頸城郡の西端の地ならんとの説もある。
比羅夫の征討は齊明四年の四月に飽田淳代の二郡を征討して一旦還りて、

又其翌年三月に再び舟師を率ひて討伐に出かけたのである。此時分の蝦夷
は常總の間より一步封疆を進めて東北に入り漸く飽田(秋田)淳代(野代)邊
迄進攻したことは、前後の形勢より推測することが出来るのである。

羊蹄の地は現今の何處なりやと云へば凡そ今の秋田大館ならんと云ふ説で
ある。是れは吾輩の創見ではない。但し大館ならんと云ふことも、實は確
固たる史實がある譯ではなく、大體の地勢と當時の狀況とに據り推測し
たまでである。後方羊蹄は和訓斯梨蔽之とも云ひ漢字に適めたまでにて別
に文字は意義はない。傳説は傳説として尊敬すべきであるが、傳説と史實
とは全然別である。

七五、戦時に於る英國の少年義勇團

英國に於ける少年義勇團の組織が如何に完備して居るかは屢々報道したるところであるが這次歐大陸戰亂に際して彼等は如何なる任務に服して居るかは最も興味ある問題である。

英國少年義勇團司令官サー、ロバート、ベーデンバフェル將軍より少年義勇團本營に向つて凡ての少年義勇兵が此の危急存亡の秋に方りて特に必要なるべき所以を通告に及んだ此の通告に接するや倫敦に於ける三萬二千の少年義勇兵は一週間に全部動員され其他の地方特に沿革諸區の少年團も均しく動員された。

是等少年團は如何なる任務に服したかは他山の石として研究の必要がある

一 住民に布告を傳達し徵發警戒等に關する任務

二 傳令騎、信號、無線電信等の方法に依れる交通及通信事務

三 敵の偵察に關する橋梁、排水竇電線等の護衛及巡邏

四 糧食、軍隊運送等に關する通信連絡を有效ならしむる任務

五 出征軍人及傷病軍人の家族を補助する任務

六 各地方少年義勇團俱樂部に施療所、避難民、救濟所、藥局、ソツプ施行等を設立する事

七 案内者たり傳令兵たりとして働く事

八 航空機の投下せる文書を傳達する任務

九 海上少年義勇團は河港及港灣を警邏し、浮標なき水路に於て船舶を案内し海岸守備隊に助力を與ふる事

以上の外、之等可憐なる少年義勇兵の服しつゝある任務は枚舉に遑まなき程である。彼等が斯くの如く重大なる任務に服する迄には、幾多の教練と

訓育をされて居るのである。例へば自轉車乘りに巧みなる少年は自轉車に森林中を驅走するに馴れたるものは山林の偵察に其れ々々適當の任務に就くのである。

更に佛國少年團の勇敢なる行爲に就き記載したるものを見るに、此佛國少年は、森林中に於ける伏兵に關して、内通することを斷乎として拒絕したるが爲め、野獸の如き獨逸兵のために銃殺されたが、彼等は悠然として電柱の所まで進み、莞爾として獨逸兵の一齊射撃を受け、從容死に就いた話などもある。(九、七)

七六、風變りの青年會事業

全國各地の青年團は其總數今や三萬以上である何れの青年會も一定の主義

綱領を定め道德實業衛生兵事等に涉り夫れ々々活動の歩武を進めつゝあるは國家の爲め賀すべきことである。

大正四年度全國青年會の現況を一瞥するに何れの地方にても青年會の仕事は略ぼ一定して別に事新しき施設もないが就中風變りのもの二三紹介せう静岡縣小笠郡山口村の青年會は左のような青年服裝に關する軍歌を作つて會員に歌はせて居る。

- 一、頭は五分刈、烏打帽衣服は無論木綿にて、シャツの袖口や、手首より一寸奥と定むべし
- 二、帯は縮緬止めにして足袋は木綿の黒と決め疊付く下駄、不似合で態と重きを選むべし
- 三、例令寒中なりとて、絹布襟巻先づ廢し、仕立短き綿服に半ズボン下

用ふべし

四、見學旅行する時は、脚絆草鞋に腰辨當輕装したる出立は、東山口青年會岡山縣廣戸村青年會の盆踊、青年會に盆踊復興の議を企て、數月來地方有志者にて調査を進め居りたるが大正二年八月を以て同湯郷村境内に大盆踊を催し、八十名の音頭方と七百餘人の青年踊子整然として準備を爲さしめ午後八時より翌朝午前三時迄踊り通したるが其間に於ける風紀に關しては特に注意を爲し理想的に舉行し會長其他有志も大に満足したと云ふこと同縣百島村の空地調査

果樹一本煙草一株或は除蟲菊の一かたまりなど、植付くるて足るべき、畑の隅をくび形の空地に屬せるものを調査し青年會の事業としたるに四百二戸の宅地に對する空地三百二十坪、全村の畑地に對する空地四反二畝歩を得たるに付き、宅地の分は果樹を畑地には除蟲菊を栽培したと云ふ。

鐵拳の制裁

一寸振つたのは長野縣下伊那の千代村青年會は會員總べて頭髮を、五分刈にして、衣服は綿服に限り、居常襟巻を禁じ、手足は太く逞しきを尙ぶなど、偏に士氣の振興を努めて居る、風紀取締に就き、夜遊びに耽り規約に背くものは見當り次第鐵拳を見舞ふことに申合せ、又賭博の家主に對しては見付かり次第、家屋を打毀すも差支なしと云ふ極めださうな。

角力の巡回教師

新潟縣の飯石郡では、各村青年會振興の氣運を鼓舞し青年柔弱の氣風を一新する爲めに、郡青年會にて本場所の力士を聘して、角力巡回教師たらしめ各村を巡回せしめ居るも奇と云ふべきである。(九、八)

七七、義經と新井白石

義經北走の傳説に付き諸書を涉獵するも正史として参照すべきものは多く見當らぬ只だ新井白石の讀史餘論に左の如く解釋して居る。

世に傳ふ此時義經死なすと、思ふに忠衡がもとをのがれしなるべし、かつ義經己に自殺して、館に火をはなちしともいふ歟。泰衡が獻ぜし首眞なるにはあらず、泰衡も始は義經すてに死しぬとおもひしに其首を得ざれば似たるもの、首さりて酒にひたし日數歴てのちに鎌倉に送れるにやかくて忠衡が義經を助けて奔らしめしをさして討しなるべし、頼朝も疑ふ所ありしかば、しきりに泰衡を討べしと望申せし歟、世に傳ふる如くならんには忠衡が討れしも義經の討れしよりさき百日に近し、忠衡既に

討れし上は義經の死近かきにあること智者を待たずして明らか也、義經手を束ねて死に就くべき人にあらず不審の事なりとも、蝦夷の地に義經の家の跡あり、又夷人飲食に必ず祭るそのいはゆるオキルミと云ふは即義經の事にて義經のちには奥へ行きしなど云ひ傳へしといふ也。

白石の史眼は世に定論があるが前には神皇親房あり後に頼山陽あるも二人とも精刻靈犀なる批評眼は遠く白石に及ばざりしと云ふ然るに彼は義經衣川討死に付き特に多大の疑ひを挿み渡北の説に有力なる推叩を與へて居る義經北走の説は享保吉宗以後の諸書に散見せるも正徳家定以往には見ることが稀である、寶永七年著の蝦夷記は本道史籍中の最も珍書であるが該記事に義經に關するものを見るに

「蝦夷人義經の事をウキクルといふ辨慶をば其儘にてよび申候義經むか

し此國のハイと云ふ所へ渡り蝦夷の大將分の娘にちなみて蝦夷が秘藏の卷物を取りたる由を日本の淨瑠璃のやうに、語りつたへ候を蝦夷人の中に、智恵の勝れたるもの共語り候よし也、義經をば殊の外崇敬いたし其城跡へは足踏みも致し申さざる由右城の石垣はシリカクと申魚の嘴にて築立候由右の魚嘴の長さ八九尺にて鐵の如く何百年過ぎ候ても朽ち候事は無之もの、由なり右城跡石垣今に存在なり」とある。

七八、傳説と史實とは別也

東鑑によれば、義經の衣川に、討死したのは、文治五年閏四月晦日である、泰衡數百騎にて襲ひしかばまづ妻をころし(二十一)子を殺して、(女子四歳、自害しぬ、時に年三十一歳とある。

文治五年五月二十二日申の時奥州の飛脚來る、六月十三日泰衡の使新田冠者高平義經の首を持來る。義盛景時腰越に出むかひて實驗す、黒漆の櫃に入れ酒にひたす、觀者皆涙を拭ふと、是れは義經の死後四十三日目鎌倉に到着したのである。

六月十三日首實檢ありて、同月二十四日には、泰衡は日頃義經を隠し置きたる科既に反逆にすぎたりと云つて、賴朝は奥州の征伐の下知を下す七月十九日師を出す、八月八日石那坂の戦ひ九日大木戸破れ、二十一日平泉陥り九月三日泰衡討たれ十一月三日鎌倉に凱旋、義經死して後纔か五ヶ月の間に三代の榮華を極めし鎮守府將軍の跡は絶えたのである。

義經の衣川にて死去せる事は史實の上よりすれば殆んど疑の餘地はない又近來の史家として一隻眼を有するものは、渡北の説に耳を傾るくものはな

いのであるが史實と傳説とは全然別である、又傳説も或時は史實以上の價値あることを認めねばならぬ。

吾輩は數年前より義經渡北に關し史實の考證に従事して居るが寡聞にして研究すれば、する程空虚を感じるのて今は全く斷念した、白石の推斷も頗る薄弱何等史實としての論據はない、只だ當時の傳説に附會して疑を存したまでである。

惟にオキクルミを土人が尊崇するので義經の事を附會しベンケレ、ベンペなど云ふ土人語あるを借用して辨慶を附會したまでにはあるまいかと思はる。

寶永中通辭勘右衛門の蝦夷島記にオキクルミの義經が蝦夷の大將分の娘と契り、秘藏の巻物を取りたることを、日本の淨瑠璃の如く語り傳へ候」と

あるを見れば寶永寛文以前より古き傳説のありし事だけは疑ひない。

白石の讀史餘論は寶永七年に著したもの、通辭勘右衛門の蝦夷島記も同じく同年に成りたるものとなれば白石は幕府の老中なれば、府庫の見聞記を讀みて始めて渡北の説を思付きたるにあらざやと思はる。

此の外前太平記、義經勳功記、鎌倉實記など種々義經に關する記事がないでもないが是等は皆な元祿以後時好を追ひて假托した史的小説とも云ふべきもので固より史實の價値はない。

七九、落首は輿論也

むかしは新聞もなければ、輿論と云ふこともない、そこで落首なるものが行はれ、事あるごとに、壁だの塀だの築地などに、落書して意を慰めたも

のである、其落首なるものには其時代の俵しほばれ中々振つたものがある。
太閤たいかうの名古屋城に出陣し、朝鮮渡海の風説かまびすしかりし時、

太閤は、一石米を買ひかねて

今日も、五斗かひ、あすも五斗かひ

信長公洛中に普請の時、江州の人都に近ければ賦役多し、

なまなれの、鮪にも似たる、近江衆

いしを重しと、持たぬ日もなし

山門より、三井寺を打やぶり、鐘を叡山へ取し時、

三井寺の兒は、はしろになりぬらん

つくべき、鐘を、山へとられて

信長公の前にて公事あり出頭人の馬之丞と云ふもの、理を非に枉げければ

せにくつわ、はめられけるか、馬丞

人畜生と、これをいふなり

江州六角佐々木四郎と、三好家戦ひあり鴨川迄出らるれど三好家つよくし

て佐々木しりぞかれぬる時、

世の中をしらうくといひけれど

鴨川までも、しよていはなし

伊勢の桑名にて法華宗門の中一致勝劣の争論出来、双方對談の上、勝劣方

の僧、一致方の坊主のふぐりをしたゝかにしめたから、

法門の道の勝劣は、しらねども

きんをしむるは、いつちめいわく

三井寺に一山相談の事あつて幾度も鐘をつき集會したが、つひに落着なか

りし、

山でらの、春の談合、来てみれば

よりあひの、かねに、腹はへるらん

諸行無常を、無常諸行と書違ひた卒都婆のわきに

無常とは、いかなる人の、諸行ぞや

そとは、はづかし、内にたておけ

京にて日吉大夫浮舟の能始つてから大に雨が降つて、

名は日吉、能するたびに、雨ふりて

芝居のうちに、うきふねをこぐ

天正十八年秀吉公小田原滞陣の時、

在陣をするがの、ふじの山よりも

たかねにかふは馬のまめかな

同じく山中の城を攻むる時、

山中をせむれば、あくるはこね山

にぐるも、はやし、あしがらの敵

慶長十九年源家康公大阪城へ寄せ茶臼山を本陣とせる時、

大將は、みなもと、うちの茶うす山

ひきまわされぬ、武士ぞなき

後陽成院御即位の日、聞くもの、市をなし、晝より夜に及んだので、

暮るまで、おしねやしたる、御そくいひ

世々のつぎめを、違へしがため

八〇、地力減耗と施肥獎勵會

本道農業の前途に對し恐るべき、悲むべき一大危険が伏在して居ることは少しく農家經濟に立入れば、直に看取することが出来る、今にして之れが救済を講ずることは最も緊要適切の事である。

其れは外ではない、本道開墾地の年々地力減耗の一事である、地力には一定の限りがある、二より一を引き、三より二を引き、年々繼續して養分を吸収すれば残るところは、礫礫不毛の瘠土と化するのには數理上瞭かなることである。

斯のごとき見易き道理を忘れて、本道は年々無肥料耕作を繼續して居る、故に或處は最早や收穫半減の處もあり、又或處は荒廢に歸して最早耕作に

適せぬところすら尠くない。

開拓當初は天與の肥料に頼り、五年乃至十年間は、無肥料耕作で充分生産を擧ぐることが出来るのであるが、其れが永久に繼續して無肥料耕作を許さぬ、一度無肥料耕作に馴れたる農家は、一種の惰性となり終に完全施肥耕作を閑却することになるのである。

吾等は昨年後志地方を巡回し、同地方の地力著しく減耗したるに驚き更に石狩原野の各村を巡回し、一層生産力の減退と稀薄なるに驚いたのである、本道農家は此際一大英斷を以て、此の恐るべき現狀に對し、回復を圖るの決心を固めざれば折角辛酸を極め開拓し子孫に繼承さすべき良土も砂上崖と化して無價値のものとなるを保し難い。

地力維持と回復に對する方策として、斯業専門家の意見は、種々あるべき

も、第一方策としては、家畜を飼養することより外ない、一戸五町歩の地力を厩肥に俟つとすれば、少くとも三頭以上の牛馬を飼育しなければならぬ。其外緑肥人糞等適宜に應用すれば、現今の農家勞力の配合上出来ない譯はなし。

此の場合差當りの事業としては多年の惰性習慣を打破すること、即ち地主と小作とを問はず、地力維持増進の急務なることの自覺を喚起するのが何よりの急務である、故に各町村に於て、共進會の如く施肥獎勵會と云ふが如き團體を作り、各人耕作の土地と其施肥の情況を鑑査して賞與を與へ旌表するが如き方法を取るは、最も手近なる獎勵方法である。(九、一二)

八一、養命補身丸

むかし能勢小作と云ふ人があつた。極月二十七八日頃、借錢に追ひつめられた、詮方なしに方々かけ廻つて、金の都合をしてと頼んだ處が、何れも多くな時で意を得る者がない。然るに粟田口の邊に彦八と云つて富み榮えた町人がゐた。是れ〱と彦八を尋ねようと路を急いだ。此彦八と云ふ者如何なる前業の拙ない事か、朝夕の飲食に黒米飯に水汁を取る程の男だから能勢先生美事に斷られた。是非ないから歸ると在つて、

たからとも、ならぬたからは、彦八が
持つたる金と我身さん玉

と讀み捨て、出た。

或人が云つた、一休和尚は慈悲深く在します程に少々は下さる事であらうから行かれるがよい、と、其處で此者和尚を訪ふて四方八方の話の末、序

の良い處を見はからつて、「如何に和尚様、人間は四百四病の其中に、貧苦ほど辛い病はない。されば御僧も内々某が持病は御存知の事、殊に此頃切にさし起つてゐる。さる醫者に尋ねた處が、此煩は我等の療治では適はない。斯様な病は醫者にも見えない。他分此の病は借金と云ふものであらう、如何なる耆婆へんじやくにかゝつても駄目であらう。乍併金銀丸と云ふ妙薬を貰ふて飲んだならば即時に直る事であると教へられました。もし和尚さまに其妙薬御持あらば一包御ほうしやに預りたい」と涙はらゝと流して云ふと、和尚之を聞き「さればこそ夫は年に二度づゝ起る病である。先づ當月今頃、秋は七月月中旬何れ遠國迄も流行し煩い申すて御座る兎に角愚僧に少しの持合せがある、一包參らせよう」と、奥に入り銀一包み取り出し上書に「養命補身丸」と書きつけ「最早再發の時は知らない」と云つ

て早々に歸した。(九、一三)

八二、農家副業の奨励

——塵積つて山となる——

現今我國の最大缺陷は何んであるかと云へば富の缺乏即ち貧乏と云ふことである、富が充實さへすれば列國に對峙しても少しも後れを取らぬのである、然るに悲いことには兵隊が強くても國民が勇武でも此の富の力か歐米諸國に較べて非常に遜色がある。

富を充實するには、何が急務であるかと云へば、先づ國內に遊民なく惰民なく老幼婦女より青年壯年者は勿論各々其れ相應なる職業に就き勤勉活動するより外良策はない。

國本を培養し富力を増進するに付き本道には大なる缺點がある其れは外か
てない本道は冬期五六ヶ月間は全く屋内に潜居して無爲徒食する習慣であ
る此の習慣を改むるにあらざれば、決して富の發達を期することは出來難
い事と思はる。

人間も蛇や熊と同一で、冬は穴居して食はず飲まず生存することの出來る
動物なれば其れでも可いが人間は是等の動物と異り一日も衣食を缺いて生
活することは絶對不可能の動物である以上は、冬期間も相當の勞力に服し
生産業に従事することは當然である。

世界各国何れの國民でも半歲稼ぎ半歲遊んで暮すと云ふ國民はないようだ
若し半年丈け勞働して半年遊んで暮し其れで國も家も富み榮ゆると云ふ割
のよいとが望まれるなら此程樂なことはないが天は自ら助くるものを助く

斯る遊惰の國民は早晚亡滅に頻するのである。

故に本道住民中就中農家の如きは是非、冬期副業を考へ農業努力を適當に
按梅して副業の收入を圖ることは個人としても國家としても急務中の急務
である。

農業は一ケ年中働いて年に一回より收入を見ることの出來ない人生を僅に
五十年とすれば年齢三十歳の一家の戸主は二十回すら收入を見ることが出
來ず四十歳のものなれば十回より收入を見ることが出來ないのである考へ
來れば如何にも心細く果敢ないものである十回や二十回の收入を見安とし
て家を富し子孫の計を爲すごとき思ひも及ばぬことである。

故に吾等は本道農家には切實に冬期副業の事を奨勵したいと思ふのである
副業は細微なようであるが、古川に水絶えず働かさへすれば毎日毎夜でも

収入は盡さない、殊に一家には壯丁の男女ばかりでなく老幼婦女が必ず數人はある、此の勞力を適當に應用して副業を營むことは一國の上にも一家の上にも非常に利益である副業は一寸云ふべくして行ひ難いようであるが北海道として最も適當なるものは畜産養蠶家禽果樹澱粉製造業の如きは副業と云ふより寧ろ主業に屬する部分となし藁細工、家庭的製絲製綿、蘭細工、杞柳細工、經木細工其他の木工業養蜂除蟲製粉其他研究すれば必ず相當の業が発見せらるゝことであらう。

要は事業なきにあらずて爲さるのである粗大なる農業經濟に慣れたる結果細微なる収入を目的とする副業の如き本道の眼中には始めよりないことと思はる塵積りて山となる大河の汪洋は潺湲たる木の葉の末くする細流より起ることを忘れてはならぬ。(九、一四)

八三、乃木大將の廢家

——再興は斷じて不可——

顧みれば明治四十五年の秋弦月高く代々木の松に懸り幽かに聞ゆる萬秋樂の哀音は靜寂を破つて萬人襟を正し檜の香床しき白布を以て被はれたる幄舎の内百官有司數千人列座して暗愁を湛へ一語を發するものなき折り柄時ならずして波の漂えるごとく此處彼處に囁きの聲聞えて恰も電氣に打たれたる刹那にも似たるは是れぞ神さりましたし大帝の御蹤したいてかへらぬよみじに旅立たれし乃木大將自殺の報の葬場殿に聞えし一瞬時の光景である。

隙行く駒の足早やみ既に三年の月日を経て今は日本武士の典型として楠

正成よ乃木の大將よと乳哺ごくむ兒童にすら其名を知られたる偉人とはなつた。

然るに茲に忌はしき風説の傳はりしことは一旦斷絶すべき乃木家は舊人知己相集つて再興の議起り其の後繼者として毛利元智氏を迎へて一應絶家の形式を整へ伯爵の後嗣となることの風聞であるは奈何にしても此語の不當なることを堅く信ずるものである。

乃木大將の遺言はまさしく家名斷絶にありしことは當時の事情に徴して明かである。假に大將の心事を忖度すれば左の三理由有しことを推測し得らるゝのである。

第一は華族は子孫に繼承すべきものにあらざること、第二は乃木家に適當なる繼嗣なかりしこと、第三は身後庸劣者の叩りに恩寵に浴すること。

吾人の見るところに依れば乃木家は大將の遺旨を遵奉して潔よく斷絶せしむべきは情に於ても理に於ても洵に當然の事と思はれるのである殊更に廢家を再興するごとき愚擧を演ずるは偶々大將の遺旨を空ふし倫理風教上にも害あつて毫も益なきことである。

乃木大將は其形に於て死したるも精神は百世に生きて帝國の國土内に磅礴して居るのである大將は物質に於て滅びたるも精神に於ては生前以上に光を放つて居る家を存し繼嗣を存する如きは始めより問題とならぬのである物質に生きんとする形式を取るときは寧ろ大將の死を無意味ならしむるのであるグラットストーンは生前華族に列することを拒み、福澤諭吉氏すら尙ほ伯爵を辭退したるにあらずや。

乃木大將は勳位榮爵を以て修飾すべき人でない丹青の上千歳滅びんとして

滅びざるの人である若し大將の家を存続せしむべき理由ありとすれば赤坂乃木邸の小なる天然石の墓碑は是れは新華族の死を粧飾すべき堂々たる鐵柵内の花崗石に改めざるべからざるのである。廢家再興の如きは偶々以て乃木家を辱かしめ大將をして地下に泣かしむるのである。然れども陛下至仁の德茲に臻りたると云へば吾人亦何をか云んやである。(九、一五)

八四、晴耕雨讀

晴耕雨讀と云ふ文字があるが、吾輩は此語がいかにも床しく懐かしく云ふに言れぬ面白味を感じるのである。此の四文字の裡には優美もあり、平和もあり、獨立もあり、現代生活に喘ぎ苦む壓迫より遠ざかる趣きがある。

晴耕雨讀と云へば、文展出品の何某畫伯の丹青に成る霞たなびき烟罩る草茅の裡に妻はつむぎ、夫は耕し、桑間に犬吠え鶏鳴く神韻漂渺たる一幅の畫圖を展べたるごとき、自然の幽趣と感興が湧出するのである。宇宙間の生物は、一つとして土地を離れて生育するものはない、地を離れて人なく人を離れて人事なして、哲學も宗教も政治も經濟も、自然を離れて成立つものはない、此の點より云へば人生に最も深甚の意義を有するものは、四六時中自然を對手として立つ農業より神聖なものはない。農業はあらゆる職業中最も美的性質を帯ぶるものである、美の中には自然美と人工美との二つがあるが、人工美は時あつて變色褪色し變形するのである。自然美に至つては、悠久であり永遠であり莊嚴である。自然美は多く農村に存し、人工美は都會に存するのである。電燈瓦斯の光は幾百燭

光を點ずるも、靜夜天心一點の雲なき月や、星の輝きには遠く及ばぬ。又黄金やダイヤモンドでいかに綺羅を飾るも春の野に咲く一輪の花の美には若かないのである。此美の中に働か生存するものは人生の幸福者である。我國は由來農本位の國である、御即位大典の式事のごときも、農業を以て神事を營むことになつて居る。悠紀主基の神穀を供し白酒黒酒を用ゐて天地の神を祭るとき純潔と神聖を意味するので決して偶然の事ではない。乃木大將は旅順凱旋の後、那須の荒野に鋤鋤を取つて晴耕雨讀を樂み、ワシントンは獨立戦争の後ヴェルノンの丘陵に退きトルストイはヤアスナヤポリヤアナにて同じく晴耕雨讀を縦にしたのである。古來偉人傑士英雄豪傑の士往々農業に托して天地の廣澤を感謝して居るのは、洵に謂ひあることである。絶海句あり

人生由來行路難。閑居偶得占青山。平生混跡樵漁裏。萬事忘機麋鹿間。遠壑移松憐晚翠。小池通水愛幽潺。東林香火沃州鶴。逸軌高風誰敢攀。

吾輩の如き誤つて都會流氓の一人となり、晴耕雨讀を求めて得ず今は百勞寸讀尙ほ意に任せない、往年雨龍原野に自ら鋤鋤を取つて田園生活を營みたることを回想して轉た感慨に堪へないので此作を作つた。

八五、獨逸の國家

——主義の勃興——

嘗て獨逸人の十戒を掲げたことがある、更にブラクマイスルと名乗る、獨逸人の發表したる汝は獨逸人たるを要すと題する訓戒は吾人より見れば獨

逸の國民性を知り亦戦局に對する觀念を知ることであれば聊か掲記する。
親愛なる我獨逸人よ汝が外人の後塵を排して模倣せんと欲したる、茲に年
あり時は來れり最早之を止めよ、獨逸人たれ、獨逸人として之を止めよ。
我等に同盟者なし只だ汝を獨逸人と爲したる神を頼め。
書くにも讀むにも、凡て獨逸語を以てすべし外國語を廢すべし新聞記者よ
批評家よ科學者よ若し諸氏が一九一四年以後にも從來の過失を繰返し英佛
の土語卑言を供給するなら之を「耻洒らし名簿」の中に記入せん。
上は大學より下は小學に至る迄獨逸語の學科獨逸歴史の學課獨逸の傳説獨
逸の文字是れが中心たるべし。
鞭を手にして我舞臺の上より外國の醜陋なる演劇を驅追すべし舞臺は美の
宮殿より高尚の徳義との會館たるべし。

活動寫眞師技師中にも其職を禁すべきものあらん何となれば是等が吾人に
示す所の雜草毒草は容赦なく拔去るを要す。
獨逸通俗歌謠を開發せしめよ何となればそれらは金鑛を含蓄すれば也快樂
の酒泉を包容すれば也、一篇の歌謠にてオペラ及びオペレットの積載に匹
敵すれば也。
書籍中の書籍はルーテルの聖書也如何なる國民も此の如き聖書を有せず。
獨逸の血液は純粹なれ、獨逸男兒は外國婦人と結婚せられ、獨逸の皇女は
露國皇子中に其匹儔を求むる必要なし、獨逸紳士は露國皇子より優れり。
汝の欲する所を云へ獨逸は世界の救主にして家族生活は獨逸の救主也。
化粧嗜好は佛人の缺點也吾人は之に戰爭を宣せり獨逸の男女は質朴に還れ
「質朴なること獨逸婦人の如し」コレが今後の諺たるべし。

不節操なるものは男兒にあらず、其精神其身體其素性其國民を汚す奴隸たる勿れ。

吾人は更に化粧と飲酒と不節操とに向つて宣戦せん全獨逸人の劍と彈丸とは今回の戦争の如く此三者に向て勝利を得ん。

宗教宗派に於て獨逸的ならざるものは凡て之を排斥攻撃せん獨逸の宗教は野に羊群を牧する人プロテスタンとなり獨逸の全力は此中に在り神は吾人を助けん。

八六、豆腐の讚と野田大塊翁

昔隱元禪師は豆腐の讚を作つた、曰くそれ豆腐は、其形四角四面にして威儀を正しく、生れ付き和かにして、貴賤の交はりさらはれず、其身は精進

潔齋なれども、和光同塵の花鯉に交り、諸社の神前にて田樂を奏し、神慮をすゝめ奉り、また春は櫻どうふに祇園林の花にいさせ、二軒茶屋のかんばしき匂ひをこめ、曙豆腐も、歌人の心を諫め妻戀の雉子焼は、珍客の舌鼓にほろ／＼をうたせ、雲月花に心をよする、詩歌連俳の席に興を催し、其上六彌太と云へる武夫も、岡部と名乗る風味にやはらぎ、寒夜には鮎鮎豆腐、瓢箪酒に一座を動かし、唐土にては、曹子建まめがらを焚き、豆を煮たる間に、四句の詩をつくらせ、兄弟の不和を直し、朝夕、貴家高僧の列に連り、經文讀誦の聲を、布目の耳に聽聞し、身を油にして、齋非時の馳走を催し、南禪寺に參つて、禪學をなし、葛たまりの衣を着て旅人を教化し、佛縁の引導して、豆腐のいたらぬ所なし嗚呼哀哉世くだり、時移り、かゝる重寶の知識を還俗させて、奴豆腐とは、さて／＼眞氣なる浮

世かな

世の中はまめて四角て柔かて

又老弱に憎まれもせず

豆腐に縁あるものは、隠元和尙に五岳和尙、其れに近代にては野田大塊である、野田は政友會名たゝる一人て、今は東洋拓殖會社の副總裁と云ふいかめしき、肩書を存する九州鎮臺であるが元は福岡で豆腐屋の家に生れ十二三歳のころまでは父祖の業を助けて、豆腐の呼賣までした人である、其性格は二六時中破れた袴を穿ち四角てやわらかて、時々俳句を唸りて興に入る時は巨口を開き、哄笑するなど面白き人物である。

端歌の四季に

「二本さしても、柔かう、祇園豆腐の二軒茶屋」

彌生三月祇園の夜櫻を観る時木の芽田樂が名物として屋臺がかゝつて客を呼て居るは今尙ほむかしの通りである是は豆腐を二本の串に刺したる田樂と武士が二本帯刀したとをくつつけ今日は祇園翌は島原と遊びまわりたるなまくら武士を酷評したものである。又夢庵の歌に

高足駄ふみそこなへる面目を

灰にまぶせる冬のでんがく

豆腐は蛋白質に富み消化し易く、滋養多き食物なればむかしより持てはやされ其名も奴豆腐高野豆腐雁來など貴人高僧の食膳に上つたことは全く豆の徳とも云ふべき歟。

八七、勸進帳と端歌の紀伊の國

岩見澤の樂隱居と稱する人や雨龍郡の北洋生と云ふ人から面白い書面を受
取つたので、今日は日曜のことにて小閑を得たれば應答しないのも禮にあ
らずと考へ、小生の知り得ることだけお答へ申さう、然し小生は文藝を以
て立つものにあらず、亦淺學なれば大方諸君に一々應答するごときは繁に
堪へない、だから今後は全然遣らぬ積りである。

岩見澤樂隱居と稱する人の書面は、豫て義經の事蹟に就て御高説拜承しま
したが、序にて辨慶勸進帳の一節

抑修驗道と申すは、天竺にては婆羅門教と稱へ、未だ釋迦如來の佛法
を弘通し給ぬ以前よりしてある教法にして、心猿飛び移る五慾の枝、意
馬忽ち走る六塵の境、即ち五慾六塵の不淨を去り自得なしたる功德を以
て世人の難病災厄を救ひ人心を善に導き、天下泰平萬民快舉の基を弘む

修驗道で御座候」

右の五慾六塵の不祥とは如何なるものですかとの問である。

吾輩は僧侶でないから詳しきことはわからぬが、五慾とは色、聲、香、味
觸。六塵とは、色、聲、香、味、觸を五塵と云ひ、之れに法塵を加へて六
塵と稱するのである。感じて慾の動くが爲めに慾と云ふ、物に觸れて染汗
するが爲に塵と云ふのである。

法塵と云ふは意根の上に善惡の諸法を起すが故に斯う云ふのである。

北洋生のは、『紀伊國音無し川の水上に云々』とある端歌の稻荷の所在に付
教を乞いたいと云ふのである。是れは吾輩も一寸面を喰つたが折角の間で
もあり、答へないのも卑怯と考へ少々調べて見た。

音無川は無論紀伊國である。船玉山と云ふ山は、紀伊の國ではない。地名

辭書にも地理書にも見當らぬ。

玉姫稻荷が三圍へ、狐の嫁入お荷物(にものつ)を擔(か)ぐは合力(がふりき)稻荷様(いなりのさま)頼(た)めば田町(たまち)の袖(そで)すりか、さしづめ今宵(こよひ)は待女郎(まちぢやう)こんこんちきやこんちきや、仲人(なかくど)は眞先(まつきき)まつ黒々の黒助(くろすけ)稻荷(いなりの)

是等(これら)の稻荷様(いなりのさま)は紀伊(きい)の國(くに)ではない、皆(みな)實(じつ)は東京(とうきやう)の舊江戶(きやうえど)吉原(よしはら)を中心(ちゆうしん)とせる四圍(よゐ)の場所(ばしょ)である、袖(そで)すりは袖(そで)すり八丁堀(はつてうぼり)を云(い)ひ眞先(まつきき)稻荷(いなりの)は向島(むかしま)白髻橋(しらむげはし)の袂(たもと)にある。黒助(くろすけ)稻荷(いなりの)とは廓内(くわくない)京町(きやうまち)に元(もと)とあつたと云(い)ふことだが。度々(たびたび)の火災(くわさい)で今(いま)はない。玉姫(たまひめ)と云(い)ふのは山谷(さんや)の痔(じ)の神様(かみさま)である。

音無川(おとなしかは)は、紀伊(きい)國本宮村(くにほんぐらむら)に在(あり)、熊野川(くまのがは)の左岸(さがん)で新宮(しんぐう)を去(さ)る水程(すゐてい)九里(きゅうり)の上流(じやうりやう)である。熊野神社(くまのじんじや)は今(いま)は國幣中社(こくへいちゆうしや)であるが、むかしは大(たい)した威光(ゐくわう)のあつた神様(かみさま)である。十二社權現(じふにしやけんげん)は第一殿(だいいでん)伊弉册尊(いさぎのみこと)、第二殿(だいにでん)速玉男神(はやたまをのかみ)、第三殿(だいにでん)素盞(すさの)

鳴尊(ののみこと)、第四殿(だいよんでん)伊勢大神(いせおほのかみ)、往時(むかし)は上四社(かみしや)、中四社(なかしや)、下四社(しもしや)あつて皆(みな)な石の寶(いしほくら)殿(でん)である。是(これ)を總稱(そうしやう)して十二社權現(じふにしやけんげん)と云(い)ふのである。

忘(わす)るなよ雲(くも)は都(みやこ)をへだつとも

なれて久(ひさ)しき三熊野(くまの)の月(つき)(玉葉八)

はるばるとさしがき峰(みね)を分(わ)きすぎて

音無川(おとなしかは)をけふ見(み)つるかな(夫木集)

戀(こひ)わびぬ音(ね)をたになかん聲(こゑ)たてゝ

いづこなるらん音無(おとなし)の里(さと)(拾遺集)

八八、米券倉庫の發達

本道(ほんだう)農業經濟(のうぎやうけいぎ)の發達(はつたつ)を圖(ず)るには種々(しゆしゆ)の機關設備(きくわんせつび)が必要(ひつやう)であるが、最(もつと)も適切(てきせつ)

て緊要のものは、倉庫業の發達助成であると思ふが本道には是等の設備が全く缺けて居る。

農産價格の維持は、一方に完全なる倉庫業が發達しなければ到底望み得ないことである。殊に本道農家には地方的倉庫業がないばかりでなく、農家自身に於て一時貯藏に必要なるべき納屋すら有して居ないのが實際の情況である。

故に農産出廻り季節ともなれば市場の價格や需給を調節するごとき餘裕なきため一時に市場に輸送されて折角の價格を崩落せしめ需給の關係を破壊することは數の免れざるところである。

農商務省にても、近來米價調節の機關として米券倉庫の設立を希望し、之れに對しては其々適當なる資金融通の途をも講じつゝある様子である。

同省 最近調査したる處に依れば、全國中此種に屬する倉庫が總計七百三十五箇を算し、内會社組合にて經營するものが二百四、産業組合にて經營するものが百七十一、農會經營が七、個人經營が三千七十一と云ふ割合だそうなが、實に微々たるものである。

又倉庫新設奨勵方法として、建設費に對して地方費補助金を交附せるものは三重、鳥取、島根、佐賀、熊本、廣島、茨城、宮城等である。茨城、宮城の兩縣では、建設費金の半額を地方費で無利子償還の方法で貸付けて居る、廣島、長崎等の如き入庫米に奨勵金を交附するところもある。又建物税其他の賦課を免除する如き、間接保護を取つて居らるゝ處もある。

北海道の如き倉庫業の必要は云ふまでもないが、其建設に付きては大なる資金を要することであれば、是等の方法に依り地方費で建設費の半額位貸

附の方法を取るは最善の方法であると思ふ。

前年凶作救済の剰餘金なども、地方費の備荒貯蓄か何にかの中に入つて居ることなれば、是等の資金を流用して各地方々の共同倉庫新設に貸付する如きは、最も策の得たるものであらうと思ふ。

幸に多年の懸案たりし農産検査は、曲りなりにも實行しつゝあることなれば、百尺竿頭一步を進めて、倉庫業建設に努力することは拓殖を進め農家經濟を緩和すべき最良唯一の方法である。(九、二〇)

八九、僧日持と題目石

僧日持は海外布教の壮志を起し永仁三年郷里松野村を發して、翌四年五月津輕石崎村より漁夫蠣崎甚平なるものを伴ひて函館に渡り、鶏冠山上の

巨石に記念の題目を墨書し、暫く函館在なる龜田村に錫を留めて附近に布教したとの説である、當時法門に歸依したるものの中には、夷人ムシヤタ兄弟なるものあり、常に日持に隨從してゐた、日持は後ち樺太に涉り滿洲に入いたと云ふことである。

函館鶏冠山の題目石は、一に夜啼石とも御經石とも云ふのである、元は藥師山を南に去つた馬背に似たるところであつたが、明治三十二年要塞築營の際船見町の奥松林深き處に移したので、今は其處を題目ヶ岳と稱して居る、碑は鶏冠に似て高さ一丈一尺、横九尺、厚八尺であつたが、移轉の際、高さ五尺、横四尺二寸に削少したと云ふことである。

此碑は元と日持上人手書の題目なりしを、其消滅を恐れて文化十三年京都本満寺の住職、浮木日龜が之を刻せしめたと云ふが、恐らくは日龜の建て

し供養塔を誤り傳へたものであらうと云ふ説である。
題目石が日持の建てたものと否とは日持の蝦夷渡北と否とは關係はない
日持の渡北は明かなる事實である、日持は今の北海道一圓に妙教を弘め、
永仁四年函館より纜を解きて、西伯利亞に渡り、遂に何處を終焉の地とし
たるかは、今日では未だ調査が付いて居らぬ。

近年の調査では北京眞定府行唐縣に法華社があり、又朝鮮開城府に妙蓮寺
と稱する妙教弘通の蹟がある。是の兩寺は必ず日持の布教に依つて建立せ
られたものであらうとの説であるが、確たる證跡は發見せられて居らぬ。
尙ほ西伯利亞地方の土教の中にシヤマン教と云ふものがあり佛事祈禱に大
鼓を打つことやら、其他日蓮宗の行事に類することが多々あると云ふはな
してあるが、未だ何人も充分の調査は出來て居らぬ様子である。

函館在には檄法華(渡唐法華)だの止苦(止法)だのと云ふところがある。是
等は法華に關係した稱呼であると云ふものがあるが、實際は土人語の轉訛
が事實であるらしい。

又和人の事をシヤモと稱する、語源は、沙門と云ふ語より出たのである
と云ふ説があるが、是れも一寸と面白いことである。能く調べて見れば、シ
ヤモとは土人語で隣人と云ふ語である、又シヤモと云ふ語があるが、シ
ヤモは彼の島と云ふ語であると云ふことである、和人の事をシヤモと云ふ
は全く立派な土人語であることを確認した。

九〇、僧日持の海外布教

一天四海皆歸妙法の法幢を高く掲げて、世界統一の天業を六百年前のむか

しに唱へ、武門の迫害宗門の怨嫉を事ともせず、不惜身命強毒逆化の大勇
猛心を發揮して悠悠逼まらず。

おのづからよこしまに降る雨あらし、風こそ夜の窓をうつらめ。

と詠じて、和光仁慈を温顔に湛へて、宗門歸依の信徒に對して法乳を施し
身延退隱後は型ばかりの草庵をしつらひて、谿間を出づる鶯の鳴音を聞
いては春の來るを知り、鹿のよぶ聲、木葉の染出づるを見ては秋の移るを
知る、九ヶ年の長さ其間一日も缺さず五十餘町の七面山の絶巔に攀ち登り
遙に相房の海濱を望みて切々の情を遣り、追孝の誠を現したる其偉大なる
人格に董陶せられたる僧日持は實に聖祖日蓮上人の弟子中六老僧の一人て
ある。

「日本乃至漢土、月支、一閻浮提に人毎に有智無智を嫌はず、一同に他事を

すて、南無妙法蓮華經を唱ふべし」とは聖人の手記中報恩抄の一節である
實に日蓮は法華經を以て日本國に止まらず、一閻浮提の世界各國に廣宣流
布せしむる積りであつた。蓮華阿闍梨の日持は、此の聖祖の遺訓を奉じて
日本國には日朗日向日照など先輩諸友の在るあり、我こそは蠻煙瘴雨鳥も
通はぬ天外萬里の波濤を超て海外布教に従事せめと志したは、實に永仁二
年である。

日持の生國は駿州庵原郡松野村で、地頭松野六郎政行の義子である。初め
同地の岩本實相寺の學林に入り、後ち叡山に登つて能登坊眞乘と稱し、文
永七年に日蓮の教義に服して其法弟たる縁を結んだのである。

永仁二年十月十三日は聖祖の十三回忌に當るので、身延には大法會が營ま
れた。日持は先師の靈廟に御暇乞を兼ね法會に參會してから一たび松野に

歸り、翌永仁三年正月元旦法弟檀越の徒を集めて始めて海外布教の志を告げ、訣別の辭を述べたのである。座に在るもの大に驚き、切に其行を留めんとしたが、一旦志したる初志は金鐵よりも堅く、二三の法弟は右より左より衣の袖に取り縋り別れを惜んだのを振り切り々々出立した時は永仁三年で、神武紀元一千九百五十五年、西洋紀元の一十二百九十五年に當り、北條時宗の薨去より十二年親鸞上人寂してより三十四年の後である。又支那では元の世祖崩じて成宗位に即き、フランシスコの始て支那に布教した時代である。(九、二七)

九一、徳望の濫用松田正久氏の記事

故松田正久氏は佐賀縣人であるが、大隈さんも佐賀縣人である、江藤新平

も副島種臣も同じく佐賀縣人である。由來佐賀縣は風變りの人物が出る土地である。前北海道長官中村純九郎氏や西久保弘道氏なども同じ流れを汲んだ一人である。

明治年間より大正の今日を通じて、司法大臣となつた人は斗を以て量かるほどであるが、司法大臣として最も部下に信望あり威令の行れたものは、松田正久氏が第一人であつたとは、今でも司法部内の異口同音である。板垣伯が嘗て松田氏を評したことがある松田と云ふ男は巨鐘の如き人物である、衝く撞木の力に依つて其音が變る、大きく衝けば大きく響き、小さく衝けば小さく響くのである、と此評は至言であると思ふ。

政友會の大をなしたるは西園寺侯の玲瓏如玉、高潔なる氣品と原君の靈犀精朔の膽氣と、松田正久氏の宏量如海の徳望と此三者が結晶して漸大を爲

したのである。西園寺侯去り、松田君逝きたる後の政友會は原君一人にて此の大厦を支ふること理に於て缺くる處あるべきは蓋し止むを得ざるところである。

明治四十四年三月頃であつたと思ふ北海道の選出代議士が貴族院議員を北海道より選出すると云ふ建議案を出したことがある。法律案でも建議案でも議會の本議に上る前には、必ず各黨派に於て代議士總會を開き豫め黨議を決定する順序である。

右の建議案が政友會の代議士總會の議に附せられた時、二三質問應答があつて直に採決したるに、豈圖らんや、別に反對も苦情もなく、無事通過すると思つて居た此案が、採決の結果起立者少數で否決の運命を見んとした。此時會長の松田正久氏は、採決したるに起立者少數にも拘らず、直に多

數と宣告した。すると躍起連が承知せず、會長々々と連呼して發言を求むるもの此處彼處より奮起した。會長は濟して居られず、某代議士に發言を許した。發言を許されたる某代議士は、威丈高になり、只今の採決は不當である、少數を多數と宣告するは、會長の越權であると怒號した。會長の松田さんは一向平氣な顔で多數か少數かは靴の音でも判ると、放言して一向取合はないで、跡の議案をずん／＼進化した。某代議士も餘りのことに呆氣に取られて會長は德望の濫用であると絶叫した許りで僅に事なきを得た。其れより德望の濫用は政海の新熟語となつて一時通用したことがある。

九二、法は神聖也人に依つて

一三三ならしむべからず

政治が墮落して、其國の隆へたことは古今の歴史を通じて、ドコにもない
今我國の政治は一步一步墮落の暗黒界を辿どりつゝあることは悲しむべき
現象と云はなければならぬ。

議員が、金の爲めに節を賣ることは世界の歴史でも、其例は澤山ある。十
八世紀時代の英國の如きも、議員は公然金の爲めに節を賣り選舉區は一箇
の商品となり、不動産となり、公に賣買されたものである。大ピットなど
始て議員に出る時など多額の金を支拂て、選舉區を買収したことは、著し
い例である、又佛國などでも、一種のプロカーさへ出來株式賣買の代理店

の如く政府は議員買収に手形を發行し議員は其所に行き公然現金と引換へ
たものである。

帝國議會も日糖事件の起つた當時は、恰も十八世紀時代と同じく、議案に
對し、幾らかの報酬を求め、政府は、通過しがたき法律案には、必ず何等
かの條件を附して賛成を求めたのであるが、日糖事件檢舉以來其空氣は全
く一掃された。

然に昨又大隈伯廟堂に起つて以來、總選舉に對しては、百六十萬圓以上の
不淨金を撒布し二個師團問題に際して大びら切つて議員買収に従業した事
は今や天下公知の事實である、其結果政界は又復大腐敗を來し遂に大浦内
相の隱退となり、今回の議員瀆職事件の大檢舉となつたのである。

今回瀆職事件は林田龜太郎以下十八名愈々豫審決定して、其々公判に付

せられた、決定書に依れば最初大浦は四萬圓を林田に交付し、林田より白川増田等に分配して關西組を買収し、又大浦より板倉中に一萬圓を渡し、日向の輝や濱信や關信等に渡し例の關東組買収に着手した。然に白川友一の一萬圓の贈賄事件は大浦の隠退にて有耶無耶となり豫審は不起訴となつた。

司法權の獨立は國家の運命に關する問題である平沼檢事總長が身を以て之に當り斷々乎として是れまで潛ぎ付けたことは國民として深く多としなければならぬ。

然し大浦男や其他男の羽翼となり、不正を働きたる江木や下岡や安達などの不起訴となつたことは司法權の獨立より見て聖代の不祥事と云はなければならぬ。

姦通には必ず相對者がなければならぬ若し姦婦のみ罰せられて姦夫が法網を遁れたとすれば、天下之れより奇觀はない法は神聖である人によつて二三にすることは斷じて許すべからざることである。

九三、獨逸の鼻意氣と媾和條件

歐洲戰亂は何時媾和時機に達するやは恐らく何人も豫想すべからざるところであらう露國の連戰連敗と英佛側の退嬰保守とは益々獨逸國民をして鼻意氣を荒からしむるのは遺憾の至りである。

最近獨逸の智識階級に屬する一團體は大學教授連を先鋒として今回新しき宣言を爲し獨逸が聯合國の野蠻に反抗して自國文明を防禦せんが爲に起ちたる所以を説明して曰く、

吾人(獨逸國)は世界を征服するの要なしされど吾人は世界に於て獨逸の文明と商業とを擴張するに出來得る限りの努力を爲さざる可らず。彼等は此主旨に基き必要なる媾和條件として要求して、曰く。吾人は英國人の侵入に對して萬金の保障を得んが爲にはドウバー海峡の佛國側一帶の地域を占領せざる可からず又白耳義一國は政治的軍事的に獨逸の支配に歸せしめざるべからず。

英國の商業は澳國及土國の援助を待ち世界の市場より驅逐せざる可らず吾人は波斯灣を占取するを要す我阿非利加殖民地は回教徒と協力して再興せしむべし阿非利加中部は不毛未開の區也吾人は他の方面に於けるより開化せるより生産なる地方を得ざるべからず。

尙ほ彼等は埃及を要求し及び償金を豫想し、海上の自由を得んが爲には吾

人は英帝國の咽喉たる埃國を領有せざる可らず、而して償金に關しては佛國より徵收するの他に更に英國の金銀を要求す、英國が過分の金銀を有するは其商業を恢復するの危険ある者也、佛國に要求する金額は多少輕減するを厭はず、これ佛人の感情を緩和するの効あらんその輕減の分は之れを英國に課するを以て適當なりとせむと。

佛國民心緩和策として償金輕減の外スエス運河の兩岸を與ふるを可とす而して最後に揚言して曰く神は英國を罰せん神はカイゼルを助けん獨逸は世界の最優等の位置を占めん。

獨人の意氣は狂暴に似たるも斯くの如く彼等をして揚言せしむるに至らしめたるものは一に協商側の不振を證明するものに非らざるなき乎我國亦戰局の進むとともに如何にして媾和會議に處するべきか如何なる條件を提げ

て會議に臨むべきか如何にして國權を維持すべきは豫め其用意なかるべからざることである。

九四、勸業諮問會

勸業諮問會提出の諮問事項は

- 一 主要農産物の改良増殖の件
- 二 農家經濟の改善に關する件
- 三 家畜の改良増殖に關する件
- 四 種畜場の事業並其經理に關する件
- 五 蠶業の奨励方法に關する件
- 六 水族の蕃殖増進を計る事

七 主要漁獲物の處理方法に關する件

八 本道に於て奨励すべき工業の種類並に其方法に關する件

九 生産物販路擴張に關する件

以上は諮問事項の大綱を擧げたるのみにて此の中各項目に分ち施設經營保護奨励指導の方法を指示し拓殖の實質より見れば鐵道港灣道路治水の事業を除きたる一切の要務を示し實に細大漏らさざるものである。

吾人は諮問會に就き多大の價値と尊敬を拂ふに躊躇しないものである又賢明なる委員諸君は必ずや一定の抱負と理想の上に於て其答申の如き必ず完璧に近きものを拈出すべきことを信じて疑はないのである。

然れども千の經綸百の施設に伴ふには必ず之に要する資源の伴ふことは遺る可らざる事である如何に經綸高遠に議論巧みなるも最後の斷案は金の一

點に歸着す、一も金二も金三も金ならざれば畢竟空論徒爾に了るのである。最近本道の拓殖は漸次退却に次ぐに退却を以てし露西亞の戦局と同じく豫定の退却を以て能事として居るのである彼の經營案に伴ふ國庫支辨金の如き六ヶ年を経過し僅に一部分の着手に過ぎず計畫樹立以來二千三百萬圓を放資すべき必要事業に對し僅に一千二百萬圓の支出に過ぎず今日迄既に一千萬圓に近き缺陷を生じて居る。

明年度豫算の如きも亦た豫定の退却を以てし豫定の五百萬圓は最少限度の二百六十萬圓を計上したるに留まる斯くの如く憫むべき状態を繼續して尙ほ拓殖の進程を論ぜんとするは恰も其喉を扼して其腹を満たさんとするに異ならず畢竟百の經綸千の抱負は一場の兒戲に類するのである。故に吾輩の諮問會に對し特に囑望すべきは徒に馬を壁に乗付けて尙鞭を下

すが如き愚を暫く留め此機會を利用して官民一致政黨政派に論なく渾然融然相倚り相扶けて深く思を本道拓殖の根本問題に注ぎ大處高處より達觀して其經綸に一步を進めんことを千思萬望するものである。尙し其れ十五年經營案にして修補すべきものあらば之れを修補して可也自然增收意の如くならず國庫補助は望むべからずとせば他に活路を求めて可也多年道論の歸嚮に察し土地改良勸業獎勵の如き生産的事業に向つては道債を募集し其實效を期するも可也膠柱にして變に處するの途を知らざるは時勢を論ずるの資格なきものである。

九五、板垣伯の鰻主義

鰻主義と云へば、なんでも、ぬらくらして、穴にばかり、這入ることのよ

うであるが、伯の主義は、決して左様な主義でなく、大に青年子弟に教訓を與ふる、蒲焼以上の味のあるものである。

鰻と云へば、到る處の河水に棲んで居る、淡水魚であることは、誰れも承知のことである、鰻は、大へん脂肪を有し、滋養に富み、ことに土用鰻と云へば、炎暑三伏の候など、強壯劑として、大に持てはやされて居る位である。

ひかしは、鰻の名所は、九州の柳川地方で京都大阪などに盛んに輸出したものである、今でこそ柳川と云へば、鰻のことのみ、思ふて居るが、實は蒲焼のことを、惣じて、柳川と云つたものらしい。

ところが、此の柳川の名物鰻も、遠方に送るには死んでほししの値打もない、どうしても、生きた儘送らねばならぬ、その送る方法が頗ぶる面白い

ので、また意味があるのである。

鰻と云ふ魚は、實に妙な魚で、若しも澤山水の中に入れて、彼をして何等の苦痛なく、遠路を凌がせると、其間に、大抵は、死んでしまふ、そこで、色々工夫して、先づ船の帆柱に、大きな石を吊して、船の動くごとに、前後左右に、揺り動き、片時も、止むことのないような構造にして、鰻の居る所は、水を少なくして、僅に脊を蔽ふ位にして置くのである。

そうすると、船の進行に伴れて、揺るも、揺るも、非常のゆりて、殆んど、人間は目の舞ふ程であるそこで鰻は、却てこれに抵抗して、どこまでも、生存を維持せんとして、満身に力を入れ、勢一杯氣を張つて居る、體中何れの所にも、すさまじい程勢力が満ち満ちて生氣充溢し居る、斯うすると、遠路十數日を経るも、些の衰弱を見ないのみならず、却て一層の勇氣

を顯して居る。

人間も、此の鰻と同じく、いかなる艱難にも、壓迫にも、抵抗して、自己の生存を圖る時は、外圍の境遇に障りがあらうとも、諸種の微菌などが侵入しやうとも、抵抗力が強く活動の元氣が横溢して居れば、何物にも、打勝つことが出来る。と云ふ、まことに味ある面白い話です。是れが伯の鰻主義と云ふのである。(九、二九)

九六、上義を好めば民服せざる莫し

今の世は餘りに非論理的である、矛盾、撞着、不可解は尋常茶飯事の如く心得人々見て毫も怪まざるのである、最近の出来事たる乃木伯爵家の相續問題と云ひ、瀆職事件の張本大浦男の不起訴問題と云ひ世道人心に及ぼす

悪影響は容易ならざることであるが、道徳心の麻痺せる現代國民の頭には餘り大なる響を感じぬ如くである。

何れの時代にも、民風の興るは、上に立つもの、之を率ゆるに在り、論語に曰く

上禮を好めば、則ち民敢て敬せざる莫く、上義を好めば則ち民敢て服せざる莫く、上信を好めば、則ち敢て情を用ひざる莫し、夫れ斯の如んば則ち四方の民、其子を強負して至る、焉んぞ稼を用ゐん。

上に居るものが禮を好めば、人民は自然に上を尊び、上の者が義を好めばそれに服せぬ人民はない、又上の者が誠實で詐らなければ、下の者は眞心を以て盡す、そうなれば幼い子供を背負つたものまで、集りなづく。と云ふのである。

現今は上に立つものに、一片の誠意なく、譎詐百端下を虐げ、變説改論は自由勝手、淫蕩、惰弱、華奢、驕傲で、只だ法律や規則のみで下を縛り上げんとして居る。

教育の如きも、亦た然りである、やれ教育勅語がドウの、戊申詔書がドウのと、口先き許りの講釋を幾ら叩いても、蓄音機のフィルムや五月蟻の鯉と同じく口ばかりで腸なく忠君愛國々々々と幾ら叫んでも鼠の忠々ほども國民には徹底しない。

上に立つもの非愛國非國民の行動を能事として、下に許り之れを強るも、何人か耳を傾けるものがあらう。

曩には田中光顯、周布公平、渡邊宮内大臣の刑法問題あり彼等は世論の囂々を恐れて事の起らんとする前、隠居引退して纔に法網を遁れ、今大浦事件

起りて、醜を天下に暴露して居る。

奈何に刑法政策の妙所ありと稱するも事件の張目を逸して、同一事件の末輩者のみ、有罪の判決を下すことを得べきであらうか、餘りに國民を愚にしたる者にあらざるなきか斯の如く明々白々の論理を無視して國民を欺かんとするも何時かは大堤の決するが如く革命の潮に浸され國家をして恐るべき深淵に陥れざることを保し難いのである。(九、三〇)

九七、華族一代制。

——偶像崇拜は一種の謔妄也——

故近衛篤磨公は華胄界の名門で、五攝家中の上卿である。頭腦透徹卓識一世を超越した人であつた。然に公は我國華族制の世襲に反對し、一世毎に

迭下して臣庶に入るの制度を主張した。乃ち公は五世、侯は四世、伯は三世、子は二世、男は一世にて普通の平民となるの制である。近衛公は藤原家の正系にて、華族界の王者である。然るにも拘らず尙ほ華族の、徒に祖先の功勳に浴して晏然世襲するの非理なるを道破し、此議論を把持したのである。華族は皇室の藩屏なりと稱して居る、我皇室は何を苦んてか彼等を以て藩屏を築くの要がある、國初以來、君子水魚、赤子の慈母に於けるが如きは我國體の精華である。「山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心我あらめやも」は我民族性の最も誇りとするところである。

現代の華族制は或意味に於ての皇室の藩屏である、皇室と人民とを遮斷するの藩屏である。上下を梗塞するの藩屏である。溝渠を築きたる藩屏である。今の華族を以て皇室を藩屏するは、案山子を以て雀を追はんとするの

類である。

世の中は三日見ぬまの飛鳥川、昨日の淵は今日の瀬、咸陽宮萬里の長城も、夢の一瞬時、平相國の驕りも一世である。三代の榮華を極めし鎌倉覇府も亦草の露、織田豊臣の榮へも遂に一代に過ぎず、時過ぎ世替れば、蘭麝の薰も糞臭に異ならず。況や小功微祿で一代成り上がり今の華族の如き、如何ぞ永世人民の上に跳梁すべき資格ぞあるべき、近衛公の如き洵に達眼達識の士と云ふべきである。

近衛公を若し今日に在しめば、今の毛利元智氏の如き愧死すべきであらう。祖先の功に浴するは尙ほ恕すべきである。正系實系にあらざして横槍りを入れて人の名爵を竊まんとする、況や千歳不磨の乃木將軍の精神を蹂躪するに於て、一層其不都合を叱責すべきである。

天一坊は將軍家を竊まんとしたが彼れは紀州公の系圖を作つて盜竊の具とした、大正の天一坊は白晝公然正系を無視して剽盜を行はんとするのである、彼れ元より罪なくとも一片の良心あらば、潔よく此際聖旨を辭退し累を皇室に及ぼさざらんことを希ふべきである。

グラットストーン、福澤諭吉、板垣伯等は皆な華族廢止論、又は一代華族制の首唱である。階紙制度の弊は終に累を皇室に迄及ぼすは、今回乃木家の例で最も適確の事實を示して居る。天はドコ迄も平等である。天は吾人に平等たるべき靈感を賦與して居る。偶像崇拜は人間界の一種の謬妄である。(以上一〇、一)

九八、郷土色を發揮すべし

西瓜には西瓜の特色があり南瓜には南瓜の特色がある飛喜百翁と云ふ茶人が、西瓜に砂糖をかけて、饗應したものを罵倒したと云ふ話を前項に書いたことがある、西瓜には西瓜の味があるので、賞美さるゝのである、之に砂糖を加ふれば西瓜の味はうせて砂糖の味となる。

其れと同じく田舎には田舎の特色があるので貴いのである、田舎が都會の眞似をするようでは既に田舎の特色は消へてなくなつて仕舞ふのである。昨今、山形や、會津地方を旅行した人の話を聞くに、同地方では高等女學校の生徒が今にモンペと云ふ洋袴をはいて通學して居ると云ふことを聞いた、又會津地方も中學校生徒が一樣にモンペに草鞋を履いて通學して居る、兵式操練なども、相變らずモンペの裝束で遣つて居る一寸見ると奈何にもをかしく異様に感ずるようであるが馴るれば却て輕快で暖かそうて心

地よく見ゆると云ふ事である。

女學校生徒の服装なども、佐賀縣では筒袖の着類に草履ばきと云ふことに教育界で一定して居ると云ふことを聞いた、徒に都會の流風を真似ることとは所謂沐猴にして冠するもので、甚見つともないものである。

吾輩など、京阪地方を旅行することに宇治や奈良の里で、有名な茶摘女の姿を見るに、乙女子の巡禮笠を冠り茜襷を掛けて、里謠を歌ひ、茶を摘む光景を能く見るのであるが、其姿を見ることに何とも云へぬ地方趣味を感じ恰も一幅の土佐巻繪を見るが如き感想が湧くのである、近來は交通機關の發達と共に、都鄙遠近の距離を縮少したるため、何れの地方でも、總て都會の流風に感染して、漸次地方趣味を失ふようになつたことは頗る遺憾に堪へないのである。

都會の風俗は一面華美であるが何となく淫靡で浮べらたるを免れない、殊に其時々流行は概して花柳界を模倣したるものでなければ、云ふに云はれぬ俗悪を感じるのである、然るに地方人は其俗悪類廢を模倣して、寒國にも拘らず、蟬の羽の夏コートや、和装に於けるヴェール類シヨール類を、着け飾つて得々たるに至つては一見嘔吐を催さず居られないのである。

地方の特色は之を大きく云へば國民の特色となり、國民の特色が即ち國民性となるのである、他國の文明を咀嚼し模倣することも、必要は必要であるが、日本人は日本人の特色があるので貴いのであり、獨逸人は獨逸人の特色があるので崇といのである、關東と關西は、氣候風土も異なり、況んや北海道と内地とは特殊の事情を異にするに於て、纏て、其特色は其地方

の文明となり、國民性となつて、藝術の上にも、文化の上にも、新しき試みとなるのである、其特色を失へば既に其時代其國土は亡滅し、頽廢することに歸着するのである。

我北海道は植民地である、新天地である、新天地には新天地にふさはしき社會を建設する意氣と抱負を有せなければならぬのである。

近來、我北海道は、何事も自己を忘れて内地府縣の頽廢の空氣を輸入して、模倣を之事とし、上は政事經濟より下萬般の流風に至るまで、漸次汚流底下の傾向あるは寔に慨歎に堪へない次第である。

九九、春が來た、春が來た

春が來た、春が來た、山に來た、里に來た、野にも來た、流るゝ水にも。

榆の木枝にも春の影は浮んで來た、春は人の氣を生動せしめ、萬物皆生の喚起に仍り活動を始むるのである。

人間の活動は瞬時も中止するものではないか、春は一層青春の血張り、前途に希望の輝く年の始である、一年の計は元旦にありと云ふが、元旦は年の始めの春を意味するのである、春は四時中最も活動を要求する爲め、一年中の計は春を措いてなす。

農家は種を下し、耕耘に従事するの準備に忙しく、禽や獸は、仔を産み、雛を育てなければならぬ。

人間の一代を通じて、青春時代が一番肝要である、春種を播く時に於て播くことを怠り、選種を怠り、惡種を下すときは秋收冬藏の時に際して收穫少く品質不良の生産品となる、收穫の時に到つて、始て氣が付き、嗚呼過

てりと思ふとも、今更後悔先にたゞざることになる今日になりて、菊作らうと思ひけりと、云ふ俳句があつたように記憶する、人の家に菊花の馥郁たるを見て我れも菊を栽培すれば此の花の如き芳香を賞揚することが出来る」と悔悟しても最早取返しが付かぬ。

春は活動の時代である、活動は生氣を増すのである、東風一たび起り強烈なる太陽の光熱を吹込むと興に、樹の色も草の色も、土の色も皆生の復活を見るのである、生の復活はレザレグションである、レポリユウションである有らゆる一切の舊套を脱して蘇生するのである舊態汚浴を脱して、清新の粧ひを凝らすのである、凡者は金に生き、賢者は希望に生きると云ふ某哲人の言がある、凡俗者は金さへあれば、生きるのであるが、賢人君子は金ばかりでは生きることが出来ない、更により大なる希望があつて、

始めて生の喚起を見るのである、希望なる哉、希望なる哉、希望は活動の源泉であり、幸福の源泉である、春は此の希望と幸福と生む一年中のサインである。

100、跋

風塵集回を重ねること茲に百回、蕪文孟浪にして讀者諸君に辜負すること尠くないのであるが、素より材識凡にして蘊蓄深からざる吾輩のことなれば、始より多くの期待を受くる積りではない、鳥語走獸の跡と同じく、日常茶飯事のことを、時に觸れ機に應じて心ゆくまゝに書き聯ねたるに過ぎなから。

むかし韓退之は、文を作りて人に見せて人笑へばよろこびとし、人譽れば

わが文いまだ俗人の喜ぶ所あるとして憂としたと云ふことである、又樂天は一詩を作るごとに隣の媼に讀ませ、お婆さんが讀んで判らぬと云へば、幾たびか修補して面白いと云ふに到つて、始めて快心したと云ふことである。歐陽永叔は

作レ文無ニ他術ニ唯讀レ書多則爲レ之自工。世人之患在レ懶レ讀レ書。又作ニ文字少。毎ニ一篇出ニ即求レ過レ人如レ此少レ有ニ至者ニ疵病不ニ必待ニ人指摘ニ多作自能見レ之。

吾輩などは金繡の文字を駢て人に誇る考へもなければ、藝術家や思想家を以て任ずるものでもない、簡易率直に云ひたいことを言ひ、舒べたいことを舒べると云ふ積りであるが其れさへ晦澁にして文辭が達せないのであれば、全く赤恥の搔き棄てである。

元來文章は心の文で、語の符牒である。繩を結んで置いても、木を刻んで置いても、さし問へはないのである。其れが段々七面倒になり、文字だの文章だのと云ふことになつて來た、解りさへすれば其れで澤山であると思ふて居る。

韓歐柳蘇や、宋灑川景の徒が幾ら立派な文章を遺しても、時代が變れば一山百文で經帥屋の裏ら打ち紙や三文菓子もんくわしの風袋位ふうくわいにしか通用しない世の中である。況や現代の三文文學提灯文學、下女文學、冷飯文學などが何んで百世に遺る氣遣いがあらう今日只今のことさへ通用すれば其れで澤山である。

人は云いたいことが云へず。喋りたいことか喋れなくなれば、其時はお陀佛である。我輩などもまた息きの根が通つて居る間は黙つて居る譯には行

かぬ。文は八代の表を起し、道は天下の溺を濟ふ位の抱負は持つて居る。
更に題を改め、ペン先を洗ふて不日再び讀者諸君に見ゆる考へである。

風塵集終

大正五年四月五日印刷
大正五年四月十五日發行

風塵集
正價參拾錢

著者兼發行者 東武

印刷者 島連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地
三秀舍

不許複製

北海道札幌區北五條西十丁目

發行所 櫻南書樓

70
363

終

